

# 海外短期研修で学生は何を学んだのかー英語コミュニケーションテストの結果からー<sup>1</sup>

*What did the student learn through the experience of the short turn oversea training? – The report on the result of English communication test –*

松井 かおり

Kaori Matsui

守本 恭子

Kyoko Morimoto

## 要旨

本稿は、健康スポーツ科学科が 2019 年度に実施したハワイ大学での 10 日間の海外研修プログラムの中で、学生が何を学びどのような変容があったのかを、主に英語コミュニケーション力の観点から報告する。学生が参加した海外研修プログラムは、英語の習得を第一義とするものではないが、アスレチックトレーナー育成などスポーツの関連領域を専攻する現地の学生たちと同じ授業を受け、現地校の体育会活動を参観し、現地の小学校においてスポーツ交流をするなかで、英語を介したコミュニケーションの機会が多く含まれたプログラムであった。参加学生たちが、外国の大学で学生生活を体験することによって、英語でコミュニケーションをとる態度や英語力にどのような変化があったかを、研修派遣前と派遣後の面接テスト結果から分析し、最後に、本学健康スポーツ科学科学生に適した事前事後学習（教授）の方法について提言する。

### 1. はじめに

近年、日本の留学生政策は、1983 年発表の「留学生 10 万人計画」に代表される外国人留学生の「受け入れ」に焦点を当てた政策から、日本人留学生の「送り出し」に焦点をあてた 2008 年発表の「留学生 30 万人計画」に転換し（広島大学高等教育研究開発センターほか 2017:1）、2019 年までに海外留学を果たした学生は、107,346 人にのぼっている（日本学生支援機構、2020）。文部科学省が 2013 年から開始した「トビタテ！留学 JAPAN」事業では、2022 年度までに大学生の留学を 6 万人から 12 万人へ倍増させるという目標を掲げた。また、日本の大学全体の 6 割を超えた学校で、海外研修や海外フィールドワークを組み込んだ授業を開講しているという（正楽、杉野、武 2017）。

しかし、「留学を通して学生がグローバル人材としてどのように成長しているのかといっ

た質の観点からの効果検証は、必ずしも十分に手掛けられてこなかった」(広島大学高等教育研究開発センターほか 2017:1) という批判がある。海外留学による成果検証の難しさの理由のひとつに、海外留学が、実に様々な形態と目的をもって実施されており、他の研修と比較し相対化することが容易でないことが考えられる。

「日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究」(同上、2017:8-9) では、留学の形態を類型化して示し、それぞれのカテゴリー別に留学の特徴をつかみ、研修参加者による評価との関係を探ろうとした。研修の類型は以下の4つの項目を組み合わせ示された。①期間(1か月未満の短期、1か月以上6か月未満の中期、6か月以上の長期)、②主たる目的(留学先で自分の専門を履修する「専門履修型」、派遣先の海外現地の人たちを対象としたフィールドワークや調査を行う「フィールドワーク型」、語学研修や異文化体験を含む「語学習得型」ほか7タイプ)③学生の参加形態(卒業までに全員が参加する「必修型」、参加が学生に委ねられている「自由選択型」など3タイプ)④カリキュラムとの内容的関係(カリキュラム全体の中に海外プログラムが組み込まれている「カリキュラム組み込み型」、他のカリキュラムやコースとの関連がない「独立型」など3タイプ)である。これら4つの要素の掛け合わせると、その研修の性質を示すことができ、研修のどの要素が調べたい成果に影響を及ぼすのか否かがわかりやすくなる。

本稿で取り上げる研修の場合は、上記の類型でいえば、「短期×専門履修型×自由選択型×独立型」である(2020年入学者まで)。「グローバル人材としての学生の成長」を質的にみるための方法として、様々な手法が先行研究で用いられているが(研修参加者による自己評価、質問紙、インタビュー、PROGテストなど外部試験)、本調査では、対面による英語コミュニケーションテストとインタビューを採用する。英語を専門とせず、総じて英語習熟度が低い学生たちが、自らの意志(「自由選択型」)で授業に組み込まれていない研修(「独立型」)に参加し、「短期」にスポーツ領域の(「専門履修型」)研修を受けるなかでの英語コミュニケーション力の変化を調べることは、つまり、語学習得を第一義としない研修であっても英語コミュニケーション力が上がるのであれば、スポーツ領域専攻学生の海外研修の意義を考えるうえで、また「短期×専門履修型×自由選択型×独立型」研修を実施する他領域の関係者にとっても、貴重な資料となるであろう。

## 2. 英語コミュニケーションテストの実施

### 2.1 実施時期、実施方法

英語コミュニケーションテストは、研修への派遣が決定した保健医療学部、健康スポーツ科学科学部生10名に対して、研修前の2019年6月と研修後の同年10月に実施した。コミュニケーションテストは、日本英語検定協会が主催する英語検定試験(以下、英検と呼ぶ)の面接指導の経験が豊かな筆者ら2名が面接官を務め、学生との個別対面式で行った。コミュニケーションテストの所要時間は1人8分~10分程度であった。過去の英検の面接試験で実際に出題された問題を協会が定める面接手順と採点基準に従って行った。面

接官が個別に採点した結果を基に、判定を吟味し結果の認定を行った。

それに加え、テスト後には、「研修に応募した動機」、「研修に期待すること」「英語学習の方法」などあらかじめ筆者たちが用意した設問と、設問に関連した事柄を自由に話してもらおう半構造化インタビューを行った。コミュニケーションテスト時の面接官と学生のやりとりとその後のインタビューでの発話は、すべてビデオカメラで記録した。収集された発話記録は、書き起こしを行い、面接テストの採点時に使用したほか、6月および10月のテスト結果の分析時に、発話内容を見直すときに活用した。なお、コミュニケーションテストとインタビューの実施、またそれらの過程をすべてカメラで撮影することについては、学生全員から調査に対する同意書を得ている。

### 3 英語コミュニケーションテスト結果

#### 3. 1 コミュニケーションテストの内容

コミュニケーションテストには、2014年度英検準2級面接試験過去問題を使用した。50語程度から成るごく短い文章（以下、パッセージと呼ぶ）と、人物の行動・状況の描写を目的とした2種類のイラストが提示された面接カードを使用した（図1参照）。学生は、まずカードのパッセージの黙読を20秒行った後、パッセージを音読し、パッセージに関する設問1題(No.1)を解答した。次に、イラストに対する設問を1題ずつに解答し(No.2, No.3)、カードを裏返した状態で、学生の意見を問う問題2題(うち、1題はカードに関連した内容)の解答を行った(No.4, No.5)。なお、設問文は面接カードには書かれておらず、筆者ら面接官の問いかけを聞き取ることができるかという点が学生にとっては、最初の関門となった。

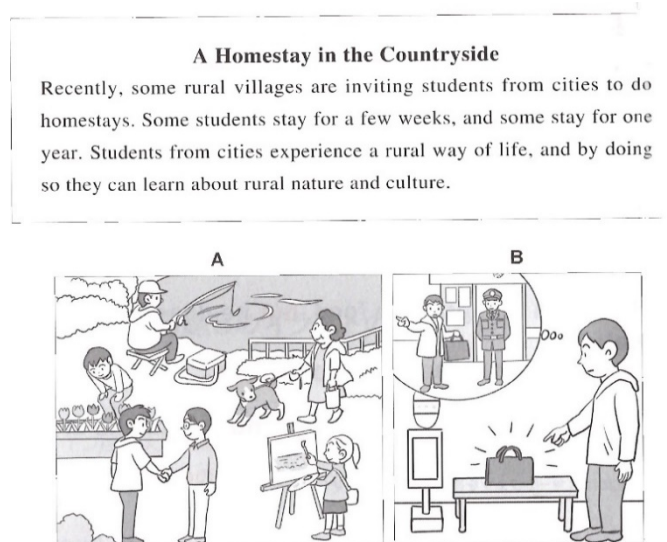


図1 面接カードイメージ (メディアビーコン (2021), p.182 より引用)

#### 3. 2 評価基準

評価に関しては、(1) 上記5題の設問に対する学生の解答および(2)面接を受ける上

での態度、(3) パッセージの音読の評価を各々5点満点とし、満点は35点であった。筆者たち2人が各々個別に採点した。No.1~No.5までの5つの質問に関する、学生の解答発話の採点基準は、以下のとおりである(表1参照)。

表1 発話の評価基準

評価	評価基準
5	質問に対して正確な表現方法で十分に伝えている
4	内容は正確で十分に伝えているが、表現方法に小さな誤りが見られる
3	内容は正確に伝えているが、十分とは言えない。また、表現方法で誤りが見られるが、相手は何とか理解できる状況である。
2	関連した内容ではあるが、質問に適した内容ではない。また、表現方法に大きな誤りが見られ、相手が理解できる状況ではない
1	質問に答えていない 質問に関連しない解答

筆者ら2人の評価が異なった場合、具体的な評価項目を検討し直した。なお、採点にあたっては、相手に伝わる表現であるかどうか重点を置いたが、重大な文法エラーについては正確さの観点から減点対象とした。そのほか、態度、音読の項目についても、1~5までの評価基準に従って評価を行った(注2参照)。

### 3. 3 結果概況

全員の評点の平均値は、35点満点中6月16.10点から10月19.70点へと上昇した(表2参照)。評点が下がった学生はいなかった。英検準2級の合格基準としては、明確な基準は公表されていないが、「各技能6割程度の正答率の受験者の多くが合格している」という日本英語検定協会の見解を元に、今回の調査からは総合点の65%である、22点を合格に達しているレベルと見なした。6月の面接では、英検準2級程度(合格に達しているレベル)と判断された学生がFの1名のみであったが、10月面接では3名に増えている(表2色つき部分参照)。

上記の結果から分かるように評点上は2回のテストでほとんど変化がない学生もいた(学生C, E, J)。ただし、6月の時点では反応もできずにただ固まってしまい、質問を打ち切らざる終えない学生もいたが、10月には、加点の対象にはならないものの、聞き返し表現の使用や“I don't know.”と身体表現を使って意思を表明する姿が観察された。さらに、C, E, J 3名の発話量が増えていることから、今後に期待が持てる。以下、各々の評価項目の結果をみていきたい。

### 3. 4 音読：綴りと音の関係理解

まず、パッセージの音読については、初見のパッセージであっても、大半の学生が5点満点中3点以上の評価を得ており、20秒間という黙読の時間であるが、相手に伝わる英語を発音できていた。

表2 派遣学生の研修前（6月）研修後（10月）の英語コミュニケーションテスト比較

学生	6月				10月			
	No.1～ No.5 解答 合計	態度	音読	総合計	No.1～ No.5 解答 合計	態度	音読	総合計
A	12	4	5	21	13	4	5	22
B	7	2	4	13	10	4	5	19
C	9	4	4	17	9	4	4	17
D	9	3	4	16	13	4	4	21
E	6	2	2	10	6	2	3	11
F	14	5	5	24	22	5	5	32
G	5	3	4	12	8	3	4	15
H	12	4	4	20	18	4	5	27
I	9	4	4	17	13	4	4	21
J	5	3	3	11	5	4	3	12
平均	8.80	3.40	3.90	16.10	11.70	3.80	4.20	19.70

※色付きの得点は、英検準2級相当の評価を受けたことを示している

### 3. 5 パッセージの内容についての質疑応答：質問の聞き取り失敗

その一方で、学生は全員音読ができたにもかかわらず、音読をしたパッセージの内容に対する質問については、10月の試験であっても5点満点中、平均1.7点と全受験者から十分な解答を得られなかった。その理由については、議論の余地がある。音読評価と照らして考えられることは、パッセージの使用語彙は、高校中級程度であり、学生にとって新出単語ではないため類推しながらでも発音はできたが、文章の中で意味をとらえるところまでは定着していなかった可能性がある。さらに、面接後のインタビューから質問が聞き取れなかった、質問が理解できなかった、という声があった。例えば、10月の試験の以下の質問がそ

れにあたる。

質問：According to the passage, how can some travelers have an interesting vacation at a lower cost? (「文章によると、旅行者たちはより少ない費用でどのように楽しい休暇を過ごすことができますか?」)

本来は、パッセージから上記の問いに該当する部分を抜き取って解答することを求められているが、学生は“according to the passage”の意味がわからず、パッセージから解答を採ればよいという手がかりを得ることができなかった。また、黙読 20 秒及び音読だけでは、パッセージの情報を十分に理解できず、解答に結びつかなかったと考えられる。

### 3. 6 イラスト描写問題：全体を関連付ける説明と途切れない発話の出現

多くの学生のイラスト描写問題での得点が研修後に伸びており、平均点としては質問の No.2 で 1.5 点から 2.5 点に、No.3 で 2.5 点から 2.8 点への伸びが見られた。その中でも、研修前の 6 月、研修後の 10 月の 2 回のテスト両方で、最高得点を出し、また一番研修後に得点が伸びた学生 F の発話に注目する。

学生 F の発話 1 と発話 2 の課題は、イラストを見て複数の人物の描写をできる限り行うものであった。発話 1 は、手を洗っている女性、ポスターを壁に貼る女性、花を花壇に植えている男性、カートを引きしている男性、犬を追いかけしている男児の描かれているイラストを説明している。発話 2 は、歯磨きをしている男児、窓のカーテンを開けている男児、ゴミをゴミ箱に捨てている男性、スーツケースに衣類を取納している女性、湯飲みに熱い飲み物を注いでいる女性が描かれているイラストを説明している。

#### 発話 1 (6 月)

学生 F 解答: In the picture, five people in the picture. Two womens [sic] and three mens[sic]. One men [sic] are put [sic] the poster on the wall, and one women [sic] the washing [sic] hers [sic]hand. One men [sic] grew [sic] the flower, and one men [sic] going [sic] running? to the cart. And one boy run [sic] the, run [sic] with dogs. (指で人数をカウントする動作をしながら)

#### 発話 2 (10 月)

学生 F 解答 : In a picture, five peoples [sic], three boys and two girls. The one girl make [sic] the tea. It's hot tea. Another do [sic] the packing clothes in the backpacks [sic]. One boys [sic]open [sic] the curtain. Another boy blushing [sic] his teeth. (歯ブラシをしている動作をしながら) Last one, the boy, do the... things go [sic] to the trash box.

(※下線は筆者らが付加した)

発話 1, 発話 2 とも、複数形の誤用や動詞の三単現 S の脱落など文法の誤りは多いが、

二つの発話の大きな違いは、動作対象をすべて“one ~”で表現していた 6 月に比べて、10 月では“another, last”と順序立てて説明している点、また人物だけでなく“*It's hot tea*”のように関連する物の説明も行い場面描写をより詳細にしようとしている点である。

また 10 月のテストでは、学生 F は別のイラスト描写課題において、英語での表現が思いつかない状況でも発話を続けることができるようになっていた。以下、発話 3 の下線部分に注目する。

### 発話 3 (10 月)

(コインロッカーに荷物を預けようとしている女性が、財布に 100 円硬貨 3 枚が見当たらず、困っている様子を描いたイラストを見て)

学生 F: She'd like to save [sic] in the coin rocker her backpacks [sic], she don't [sic] have, she didn't have the [sic] three coins, 300 yens. So, she now, she now, mmm... it's like a nervous? Not nervous (but) something like that.

(※下線と括弧は筆者らが付加した)

人物の感情を表す表現“nervous”を、上がり調子のイントネーションを用いることで、状況にふさわしい語であるかどうか確信が持てないことを表明しながら発話を続け、適切な語を探せなくても、“something like that”（「それに近い感情」）と代替表現を見つけて発話を着地させている。この中で、“mmm”, “something like that”のように、教科書では学ぶことが少ないが日常会話ではよく使用されるフレーズやフィラーを即興的に使って間を埋めているのが特徴的である。

この学生 F は、派遣参加前から積極的に ELS (“English Language Salon”) でネイティブとの会話に参加するなど会話経験は豊かな学生であったため、6 月の段階でも“uh-huh”などの相槌やジェスチャーを適切に使用していた。研修後には、さらに自身の発話の中でもジェスチャーやフィラーを用いるようになり、発話 3 にみられるように、表現に困る場面でも発話を途切れさせず対話のリズムを保つことができるようになっていた。

### 3. 7 学生の意見を求める問題：シンプルな語彙を利用した応答

学生の意見を求める問題は、問題の意味を理解し、トピックについて特定の知識を必要とする場合があるが、6 月、10 月のコミュニケーションテストのいずれの設定も特別な知識を必要とする内容ではなかった。しかし、発話の量や応答の適切さには個人差が大きかった。

その中で、6 月、10 月のテストで一定の発話が観察された学生 A の発話変化をみたい。A は研修前の 6 月、研修後の 10 月とも発話の量には大きな差はなかったが、発話リズムという点で大きな違いがあった。6 月のコミュニケーションテスト時の発話 4 では、面接者に発言を促されて口を開くまで 15 秒かかり、また「ファーストフード店は、将来もっと流行ると思うか?」という問いへの理由を 2 つ示しているが、そのうちの 1 つ、「手早く食事を

したいと考える人がいる」という理由が英語で十分に表現できなかつたうえに (発話 4、#6)、発話を終えるまでに 1 分近くを費やした。

一方、10 月の試験では「将来外国人がもっと日本に来るようになると思うか?」という質問を 1 回で聞き取れなかつたものの、自然なタイミングで聞き返しを行い(発話 5、#2)、東京オリンピック開催による外国人増加を理由に挙げて、発話内容に一貫性のある応答を行った。発話 6 についても同様に、質問について、2 センテンスを使って説明ができています。

この学生 A の発話の状況は、横川 (2009) の調査結果とも符合する。横川 (2009) は、約 3 週間の海外英語研修に参加した日本人大学生を対象に、学生の語彙力を発話潜時 (発話開始までにかかった時間)、発話総語彙数、語彙タイプ (異なり語数) の観点から、研修前、研修後で調査している。その結果、発話潜時は有意に速くなり、発話総語彙数も有意に増加したが、異なり語数については、有意差はみられなかつたという。つまり発話数が増えなくても、そこに出現したのは、少数の語の種類とワードファミリーだけであり、学習者が発話に用いる語が極めて限定的だつたことが報告された。学生 A についても、発話開始までにかかる時間が速くなっていることが顕著である。また使用語彙はシンプルであり、学生にとって親密度の高いものを使用していると推測される。A は、発話量こそ顕著な伸びはなかつたが、発話開始までにかかる時間が短くなつたことで、長い沈黙や言い淀みが消え、一定のリズムでことばを重ねていく発話ができるようになり、やりとりが自然に成立するようになった。

#### 発話 4 (6 月)

1. 面接者: Do you think first food restaurant will become more popular in the future?
2. 学生 A: (首を縦にふる)
3. 面接者: Yes or No?
4. 学生 A: Yes.
5. 面接者: Why?
6. 学生 A: (15 秒沈黙) People think s[sic]... people thinks [sic] ..., eating food early and first food is not expensive.

(※番号は筆者らが付加した)

#### 発話 5 (10 月)

1. 面接者: Do you think more foreigners will visit Japan in the future?
2. 学生 A: Sorry, one more please.
3. 面接者: Do you think more foreigners will visit Japan in the future?
4. 学生 A: Yes.
5. 面接者: Why?
6. 学生 A: Yes, so [sic] I think. They will come Tokyo Olympics. Tokyo Olympic is big



sports event, so many people [sic]come.

(※番号は筆者らが付加した)

#### 発話6 (10月)

1. 面接者：These days, a lot of people buy lunch at convenience stores. Do you often buy your lunch at a convenience store?

2. 学生A：Yes. I often buy onigiri and fryers. So, it is very delicious but it is a little expensive.

(※番号は筆者らが付加した)

#### 3. 8 まとめ：研修前英語学習/教授の課題

本報告の対象である短期研修は、語学研修を最大の目的とするものではなかったが、研修後、学生たちの英語コミュニケーション力は総じてあがっていることがわかった。具体的には、日本英語検定協会が高校中級レベルと定める準2級相当の習熟度を持つ学生が研修前の1名から研修後には3名に増加し、残念ながら準2級レベルに到達しなかったその他の学生も、評価点数を伸ばした。

特に際立った変化は、対話リズムと対面姿勢の維持ができるようになったことである。研修前には、学生が理解できない、答えられない質問に対してはうつむき長く沈黙してしまう学生が多かったが、研修体験後には、聞き返し表現や、「首を振る」という身体反応、“I don't know.” “Sorry, I can't.”という発話が面接者の目を見て適切なタイミングでできるようになった。

最後に、今後、短期研修派遣学生が英語コミュニケーション力を上げるために課題となることを述べる。今回の研修参加学生は、みな音読は一定の評点を得ていたことから、基本的な綴りと音の結びつきは習得できていると考えられる。しかし、大学が推奨している ELS (“English Language Salon”) で、挨拶を含む定型表現を中心とした会話練習の機会を体験していたにも関わらず、状況を即興的に説明することや自分の意見を求められたときに応答ができないことが目立った。これらの会話に必要な語彙表現を増やすためには、学生が興味をもつ分野のリーディングやライティングの経験を積み重ねることが必要になってくるであろう。

今回の短期海外研修派遣学生で最高得点をとった学生 F は、入学時には上位成績者の選抜クラスには入っておらず、「英語学習は大学2年生以降、海外留学に興味をもってから開始した」「外国人と話したくて、外国人が多く集まる店に出かけたり、英語でチャットをするネット仲間を探すことから始めた。英語の YouTube もよく見る。でも自分は細かいところがまだ言えないので、正確に話せるようになりたくて、今は文法を勉強し、ニュース記事など英文を読むことに力を入れている」(6月研修前インタビュー)と述べている。彼の語りが見せるように、大学入学後でも、適切な学習動機があれば、また学生が好む学習スタイルを見つかることができれば、学生は自ら英語学習を進め、自分の学習経過をリフレクション

する力も身に着けていく。教員の役割は、学生ひとりひとりの興味や進路、好みの学習スタイルを聞き取りながら見守り、学習方法などのアドバイスを求められたときに相談相手になることであろう。

今後、短期海外研修前に行う英語コミュニケーション力育成のための準備としては、全体に一律の課題を実施するだけでなく、個々の参加学生が自分に適した学習方法を見つけ自分で学習目標を立てるためのガイダンスの実施であろう。それによって、学生が研修体験後も学習を継続する自律的な学習者となりうると考える。

次稿では、本稿ではほとんど触れることができなかったが、研修前後に行った学生へのインタビューと学生が執筆した研修報告書(2019)について、異文化理解の観点から学生の変容を報告する。具体的には、「自国の文化と他国の文化を相対的にみる態度」(Byram 2008:13)や「省察による自己認識の相対化」(箕曲、二文字、小西 2021:55)をしようとする態度の現れについて分析を行い、「留学を通して学生がグローバル人材としてどのように成長しているのか」を探る。

#### 謝辞

本報告にあたり、面接調査へご協力いただいた派遣学生のみなさんと、円滑な面接の実施にご協力くださった学事一課の高木広美氏をはじめ教職員の皆様にお礼申し上げます。

#### 注

1. 本調査は、朝日大学健康スポーツ科学科研究倫理審査委員会の承認を得て実施された(承認番号 2019005)。

2. 態度の評価は以下の基準にしたがって行った。

5点：自然な態度で積極的に会話を遂行しようとする意欲が見られる。4点：自然な態度で会話を遂行しようとする意欲が見られるが、積極的とは言えない。3点：会話を遂行しようとする意欲が見られるが、緊張などから相手の目をみてコミュニケーションを取ることができず、発話を促される場面も見られるなど不自然さが目立つ。2点：会話を遂行しようとする意欲に欠け、解答が“I don't know”のように固定されている。1点：会話を遂行しようとする意欲が見られず、沈黙が目立つ。

また音声の評価基準は以下にしたがって行った。

5点：明瞭で適切な音声で、相手に正確に伝わる。4点：適切な音声で、相手に正確に伝わる。3点：発音上での誤りもみられ、十分に内容が伝わらない。2点：発音上での誤りが多く見られ、相手に内容を伝えることが困難である。1点：相手に何を言っているのかわからない不明瞭な音声。

#### 引用文献

朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科 (2019)『学生短期海外研修報告書』(未公刊)。

- Byram, M. (2008) *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections*. Multilingual Matters Ltd.
- 広島大学高等教育研究開発センターほか (2017) 『平成 29 年度 文部科学省委託事業 日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究』 成果報告書.  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/\\_icsFiles/afiedfile/2018/11/22/1411310\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afiedfile/2018/11/22/1411310_1.pdf) (2022 年 4 月 1 日アクセス.)
- メディアビーコン (2021) 『これで合格！英検準 2 級の新しい教科書』 高橋書店.
- 箕曲在弘、二文字屋脩、小西公大 (2021) 『人類学者たちのフィールド教育 自己変容に向けた学びのデザイン』 ナカニシヤ出版.
- 日本学生支援機構 (2020) 「2020 (令和 2) 年度 日本人学生留学状況調査結果」  
[https://www.studyinjapan.go.jp/ja/\\_mt/2022/03/date2020n.pdf](https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2022/03/date2020n.pdf) (2022 年 3 月 31 日アクセス.)
- 正楽藍、杉野竜美、武寛子 (2017) 「大学の国際化における海外留学支援制度 —留学促進に向けた教育体制の構築に向けて—」『大学教育研究』第 25 号, 神戸大学大学推進機構, 103-119.
- 横川博一編 (2009) 『教育・研究のための第二言語データベース 日本人英語学習者の英単語親密度 音声編』 くろしお出版.

松井 かおり (保健医療学部健康スポーツ科学科教授)

守本 恭子 (保健医療学部健康スポーツ科学科非常勤講師)